

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	エコミュージアム研究会組織の形態とテリトリー：広島エコミュージアム研究会の活動から
Author(s)	浅野, 敏久
Citation	エコミュージアム研究, 8 : 67 - 76
Issue Date	2003
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045695
Right	Copyright (c) 2003 日本エコミュージアム研究会
Relation	



エコミュージアム研究会組織の 形態とテリトリー

—広島エコミュージアム研究会の活動から—

浅野 敏久
広島大学

1. はじめに

報告者は1995年の山形県朝日町における大会以来、毎回J ECOMSの大会に参加し、各地の取り組みを大会期間中あるいは日を改めて見聞してきた。そして、すでに実績をあげている地域を訪れるにつけ、エコミュージアムに馴染みのない地域、あえていえば「普通の」地域で、いかにすればエコミュージアム活動を立ち上げて広げていけるのかに関心を持つようになった。これは報告者の個人的な関心であるとともに、今後のエコミュージアム活動の展開を考えていく上でも重要な課題である。

そこで報告者はそれを試みるべく、先の見通しもないまま、知人に呼び掛けて「広島エコミュージアム研究会」（以下、EM研）をつくり（2000年4月）、以後、継続して活動が続いている。立ち上げの経緯により報告者ともう一人のメンバーH氏が会の発起人となり、必要に応じて「代表」や「事務局長」になっている。会員（と発起人が認識している人）の数は100名を超え（2002年10月末現在）、会規約等をもたぬものの行政や民間財団の助成金を受けて

活動するなど、実体のある任意団体としてふるまい、相応の実績を残している。

本報告では、EM研の活動を紹介しつつ、その活動に関わる中で意識するようになった、エコミュージアム活動における組織と空間に関する問題提起をしたい。

2. EM研の組織と活動

EM研は、報告者とH氏を発起人とするものの、会則・規約を定めていないので正式な役員や会員はいない。当初は10名程度の知人同士の集まりからはじまり、電子メールでの情報交換が続けていたが、立ち上げから約3ヶ月後、無料のメーリングリスト・サービス^{*1}を利用したメーリングリストをつくることになった。その後、メーリングリストへの登録という形態でメンバーが増えていった^{*2}。会員にあたるものはインターネットのメーリングリストの登録者である。したがって発起人は登録者を会員だと認識しているが、登録者100名余の中には、研究会の会員だという認識を持つ人もいれば持っていない人もいる。いうなれ

ば研究会の実体はメーリングリストということになるが、これは単に情報をやり取りするだけの存在ではなく、活動するためのツールでもある。メンバーは誰でも企画の発案者になることができ、電子メール上でそれを紹介し協力者を募り、自分の責任で企画を遂行することになる。

メーリングリストのメンバーになるだけという気安さから大学生など、初めて市民活動に関わるといふ人もいれば、すでにいろいろな活動をしている個人やグループのリーダー等も登録されている。彼／彼女を起点としたイベント等の情報発信とそれへのメンバーの応答が、会の具体的な活動実践につながっている。電子メールを介した情報交換が定着^{※3}してきた現在、既存のまちづくりや環境関係の市民グループを連携する市民グループとしてのエコミュージアム研究会に展開していくのが、同会の今後のあり方として望ましいと考えている。また、報告者以外にも大学教官がメンバー^{※4}にあり、講義や実習などを通じて研究会が紹介され、学生が地域活動に参加する窓口になっている。

実際の活動には、表1に示すようにEM研として行う活動と、研究会のメンバーが個人ないし他のグループとして行う活動とがある。狭義にとらえれば、本研究会として行っている活動は「ホタルの宿」（東広島市志和堀）で行われる活動の一部、エコミュージアムに関連する勉強会・見学会、東広島まちづくりセンターの運営（設立運営団体の1つ）、各種の依頼や問い合わせ等への対応、ならびにメーリングリストの管理である。

EM研として行う活動	メンバーが行っている活動
<ul style="list-style-type: none"> ●「ホタルの宿」での活動 ●勉強会・見学会 ●東広島まちづくりセンターの運営への参加 ●依頼や問合せの対応 ●MLでの情報交換とMLの管理 	<ul style="list-style-type: none"> ●ネイチャーゲーム・自然観察会 ●里山保全活動 ●サロン大学 ●酒蔵地区の保全活用 ●ボランティアガイド ●子育て支援サークル ●大学の野外授業 等々

表1 広島エコミュージアム研究会に関連する活動

また、メンバーが別の立場で行っている活動には、ネイチャーゲームや里山保全活動、市民の学習交流サロン活動、歴史的町並である酒蔵地区の保全活用活動、ボランティア

ガイド、子育て支援サークル活動等がある。これらの活動はEM研が行っている活動ではないが、活動に際し、イベント案内や協力依頼の電子メールが流れ、メンバーは折々にこれらの活動に参加することになる。既存グループ間の相互協力に貢献している面もあり、EM研のメーリングリストが新しい出会いやネットワークをつくる一助になっている。

3. 活動例

－「ホタルの宿」手作りミュージアム－

現在、もっとも労力を割いているのが、地域の小さな自然学校と称する「ホタルの宿」（写真1）を拠点として、6月に2週間ほど開館する『「ホタルの宿」手作りミュージアム』で、今年で2回目になる。地区の「ホタルまつり」とも連動し、期間中600人前後の来館者を迎える。外部者の活動ながら、地区の方の協力や賛同も2年目になると広がり、分館もでき、週末の企画イベントの講師としての協力や展示物の提供などを受けることができた。



写真1 「ホタルの宿」として利用している民家
手作りミュージアム初日。水槽展示をつくるためのイベント

なお、「ホタルの宿」はこの地区に10数軒残る茅葺き民家のひとつで、EM研発起人のH氏が個人的に借り受け、EM研に限定しない彼のボランティア活動の拠点として使っている。「ホタルの宿」での活動は彼によって行われ

ているが、そのなかのいくつかをEM研が主催することがある。その代表的なものが『ホタルの宿』手作りミュージアムである。なお、このように文字化すると両者がはっきりと仕分けられているようにみえるが、実際にはあいまいな部分も多い。『ホタルの宿』手作りミュージアムについても、EM研主催であるが、企画・実施・運営全般にわたりH氏が中心になっている。

「ホタルの宿」手作りミュージアムは、ホタルの名所となっている当該地区において、立ち寄ったホタル見物客がこの地域や周辺の自然などの情報を得る場とすることや、子どもたちに自然体験をしてもらうことなどを目的としている。通常は後者を中心とした活動を「ホタルの宿」では行っているが、この事業期間中はこの家を博物館と見立て、屋内に水槽や写真、ポスターなどの展示を施し、ホタル見物客向けの対応もしている。展示には、ホタルの飛ぶ夜には見えない川の様子、特に魚などの生き物と水質に関するもののほか、この地域に残る茅葺き民家の写真や、昔の生活や環境をうかがい知る写真のパネル展示などを行った。また、期間中は夜間の展示だけではなく、週末には企画イベントと称して子どもたちの「お泊まり会」や大人向けの勉強会、土地の方の話を聞く会なども行っている。

写真1は、2002年の開館初日のような様子である。メイン展示となる水槽はオープン時には設置されているだけで中身は入っていない。写真にあるように展示する魚等は、子どもたちの川遊び体験と連動させてあり、子どもが実際に川で魚を捕ってきて（写真2）、採取場所を地図化し、



写真2 水槽展示用の魚捕り（体験学習）

集めた魚の解説パネルを自分たちでスケッチして作成する（写真3）。子どもたちが描いた絵は、水槽内の魚を示すものであると同時に小さな児童絵画展のようにもなる。また、魚も絵も期間中固定されたものでなく、来場者が絵を描いたらそのまま展示に加えられることになる。

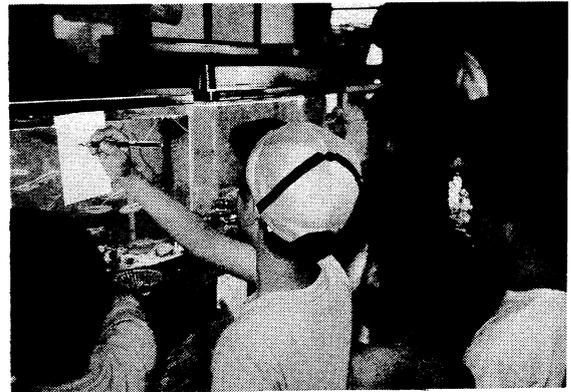


写真3 集めた魚の観察とスケッチ（絵は展示する）

その他、ホタルの棲息する川の水質調査を行い（写真4）、その結果をポスターにして展示する（写真5）ことも行った^{※5}。

また、2002年の活動では『ホタルの宿』手作りミュージアムだけでなく、「囲炉裏のある手作りミュージアム」、「小さな茅葺き農家の休憩所」など、当該地区住民の方がEM研の試みに賛同し、自宅を開放してくれた。前者においては、日頃、集めた農機具類50点以上が土間や壁に展示され^{※6}、一般の見学に供された。また、囲炉裏を囲んでの勉強会等も手作りミュージアムの企画イベントとして実施した。

この他にも当該地区には、大きな茅葺きの母屋をもつ造り酒屋（千代の春酒造）や、かつての広島からのアメリカ移民と地域の関わりを語る文化財（時報塔）、現役の茅葺き職人など、有形無形の資源に恵まれている。



写真4 身近な水辺の水質調査



写真5 水質調査結果を手作りミュージアムで展示

テリトリーの設定がないので、活動範囲はそれに縛られることはない。あえて分節的に示すと、県域スケール、市域スケール、地区スケールの3つに分けられる。

また、テリトリーの設定がないことに加え、EM研は基本的にネットワークにすぎず、必ずしも明確な組織ではないため、その活動は前述の通り、会がその名称を使って行う活動と、ネットワークを構成する個人やグループが行っている活動とがあり、両者の境界はあいまいである。このこともEM研の活動空間を考える際の留意点となる。

ここではまず、EM研の活動を広義にとらえて、メンバーの活動地がどのような広がりをもっているかを確認する。県域スケールでは、メンバーの数は少ないものの県内各地に活動の場は広がっており、島根県側に活動が広がる可能性もある。これらではメーリングリストに登録して情報交換をしているというだけでなく、現場を訪れたり活動に参加したりといった人的な交流も行われている。東広島市住民で活動フィールドを他所にもち、通いで活動している例も複数ある。ただし、EM研としての活動はこの空間スケールでは行われていない。

次に、東広島市とその周辺という意味での市域スケールの活動をみる(図1)。まず、メーリングリストに登録している人の大部分は東広島市在住であり、メーリングリストを介して流れる情報の多くは東広島市とその周辺のものである。電子メールで流される情報の量から判断すると、話題になることの多い活動地は、志和堀の「ホテルの宿」、西条酒蔵地区、寺家の里山と市民の交流のための「サロン大学」、広島市安芸区阿戸町の「あ〜と村」等がある。

「ホテルの宿」以外はそこでEM研が主体的に何かの活動をしているというわけではなく、それぞれの場所での活動のキーパーソンがEM研のメンバーになっていてEM研内に情報発信し、それに応じて他のメンバーがイベントの客になったり、スタッフとして手伝いにいたりするような関わり方をしている。EM研のメーリングリストは各活動間の人的交流を促すきっかけになっている。なお、メンバーの勧誘を個人的な人脈やクチコミによっているので、活動は里山保全・活用に関するものや環境教育に関連するものに若干偏る。ただし、里山関連の活動地だけで5、6箇

4. EM研の活動空間

(1) メンバーの活動からみたEM研の活動空間

EM研は、エコミュージアムを意識したつながりではあるが、特定のテリトリーを前提にしていないのでその活動空間を示すのは簡単ではない。そもそも発端において、会の名称を「東広島」とするか「広島」^{※7}とするかの議論があり、エリアを限定しない方がよいとの理由で後者を採用することになった。さらにこの「広島」は地名ではあるが、テリトリーとしての「広島」を想定したものではなく、メンバーは県内の人やグループが中心になるだろう(そのような広がりをつくれたらよいだろう)との思いが込められている。

図1 メンバーの活動地（市域スケール）

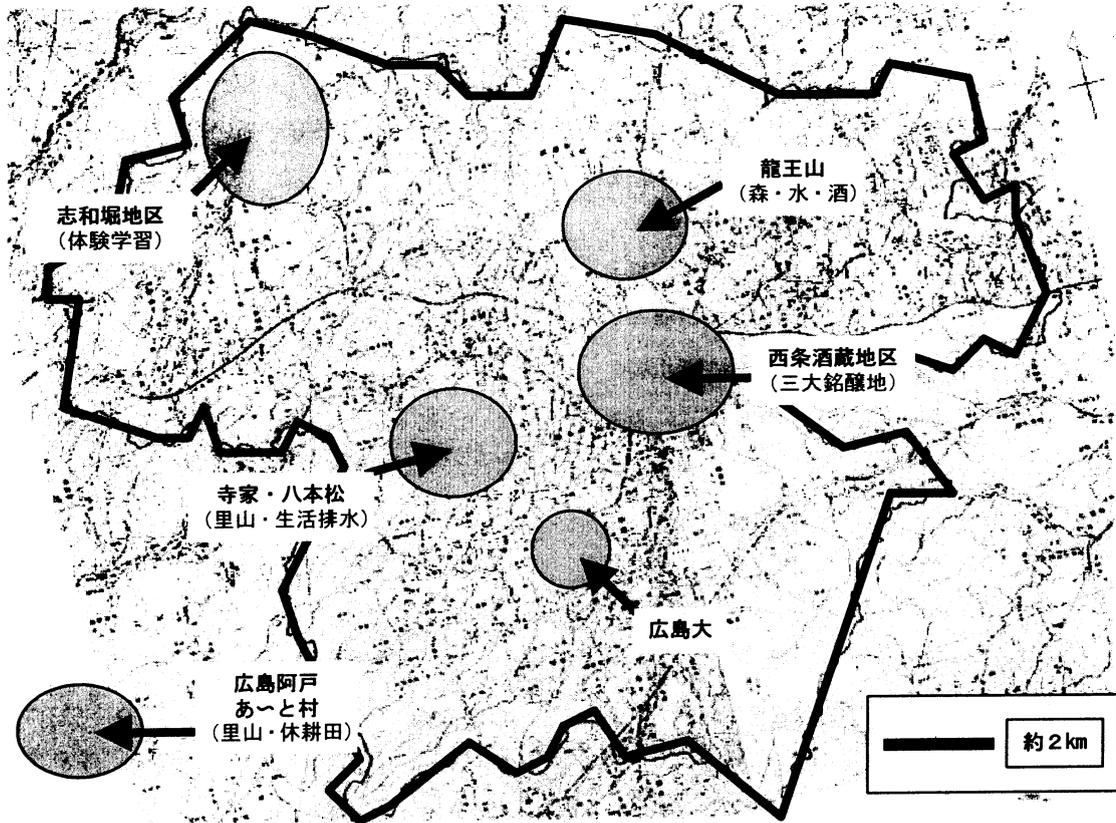
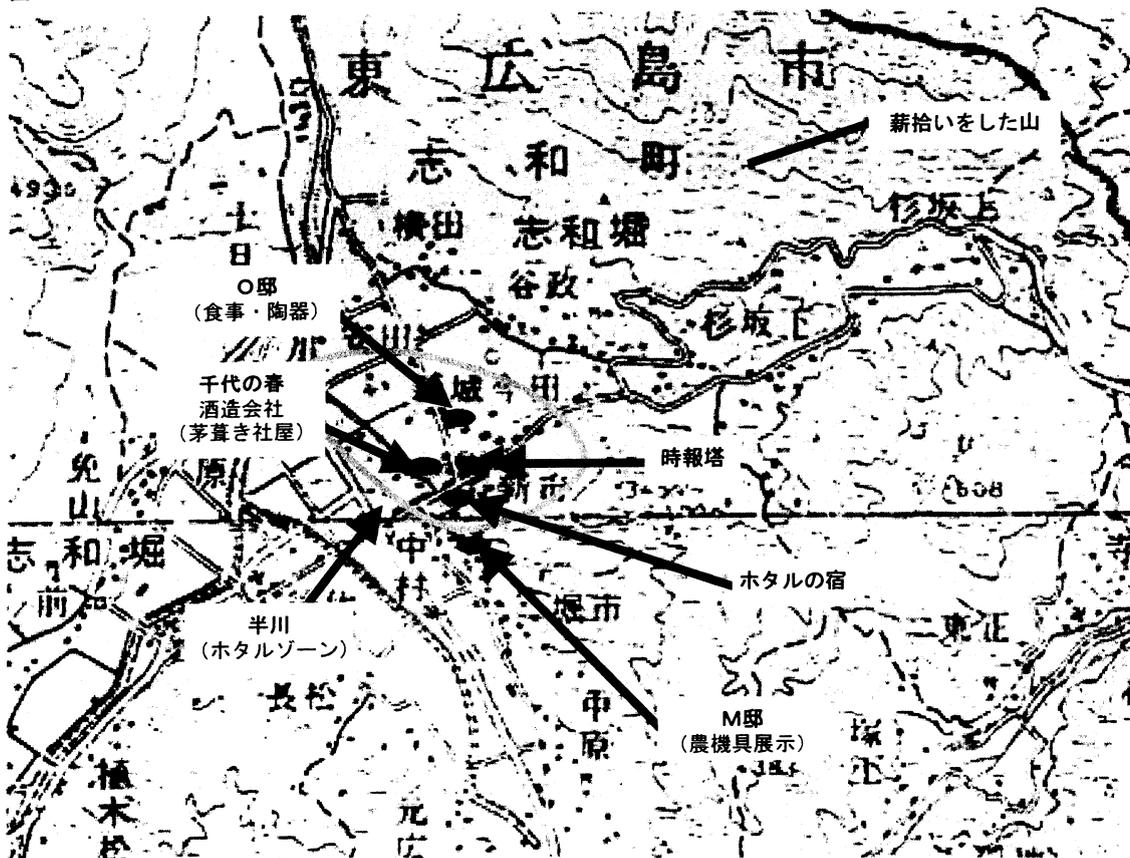


図2 メンバーの活動地（地区スケール・志和堀地区）



所あり、里山エコミュージアムのようなテーマ設定も可能である。

地区スケールの活動については、EM研が会として関わる東広島市志和堀地区を取り上げる^{※9}（図2）。ここでは「ホテルの宿」を拠点として、「手作りミュージアム」を開催したり、勉強会や研究報告会、交流会等を開いたりしている。EM研発足前のイベントであるが、五右衛門風呂を題材にして、里山と住民のつながりを学ぶ体験の機会をもったこともある。その時には、五右衛門風呂と囲炉裏のある民家を1日借りて、山での薪集めからそこまでの運搬、薪割り等の作業をし、薪で風呂を沸かし調理をした。食材はアイガモ農法で栽培した米とカモ、当該地区の豆腐屋の豆腐、地酒など、近在の食材にこだわった。最後は風呂に入り食事をしながら、里山談義を行うといった内容であった。「ホテルの宿」にも五右衛門風呂があり、この時の経験を活かした五右衛門風呂体験活動を継続している。

「ホテルの宿」での活動では、家の裏を流れる小川（半川：写真2、4）を子どもたちを遊ばせる場所として利用する他、「手作りミュージアム」の際にサテライトと位置づけた民家や文化財なども散在する。茅葺き民家や白壁赤瓦の民家と水田の織りなす景色は、大きな都市に近い割には農村的な雰囲気をよく残している。現役の茅葺き職人の方も住んでおられ、休耕の棚田などには茅場として利用されているところもある。

「ホテルの宿」を中心とする活動はこのような環境の中で行われており、志和堀地区ないし半川流域をひとつのテリトリーとみなした小規模のエコミュージアムを想定することができる。

(2)「手作りミュージアム」からみたEM研の活動空間

次に、「『ホテルの宿』手作りミュージアム」という具体的な活動を取り上げ、その展示からみたEM研がイメージする地域の範囲について考察する。この展示に際して報告者は展示物のいくつかを作成するなど直接の関わりを持っているが、この場でどのような地域を対象とするのかを主張したり、誘導したりはしていない^{※10}。H氏を中心としたスタッフ（報告者を含む）の話し合いの中で、何を

テーマにするのか誰が何をやるのかが決まっていた。

その結果、「地域の小さな自然学校」というキャッチフレーズをもつ『『ホテルの宿』手作りミュージアム』においては、その展示の中にいろいろな空間スケールの「地域」が描かれることになった（表2）。大まかに分ければ、範囲の広いものから、西条盆地ないし東広島市という地域、志和町という東広島市成立前の町域、さらに旧村で大字レベルの志和堀という地域となる。ホテルの名所とされ、ホテルまつりという地区のイベントが開催されるのは志和堀という地区を単位とする。展示においても川の生き物や水質などはこのスケールの地域を扱っている。実際の展示にも地図を用いるが、そこではこのレベルの空間が描かれている。

西条盆地(市)	志和町(旧町)	志和堀(旧村)
<ul style="list-style-type: none"> ・溜池の植物 ・里山 ・賀茂地方の昭和の写真 ・スタッフや後援機関 	<ul style="list-style-type: none"> ・志和の写写真 ・茅葺き民家の写真&地図 ・時報塔(移民の話) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホテル ・魚等(水槽) ・川の水質 ・ホテルの地域づくり ・農具・民具

表2 手作りミュージアムで表象した地域

しかし、一方で溜池の数が全国有数とされる西条盆地の水辺の植物の写真パネル展示や高度経済成長期前後の山の景色や人々の生活景の写真パネル展示など、広い範囲の地域も表象している。また、後援者として東広島市の名前が看板に書かれていたり、現場のスタッフに当該地区の住民はおらず、逆に広島大学の学生など、東広島市民がそれを担っていたりと、組織面では東広島という範囲がアピールされた。

情報提供者側の地域スケールが統一されていないので、来場者が展示から受けとった「地域」のイメージもばらつくことになった。来場者アンケート^{※11}において、「ホテルの宿」では「地域の小さな自然学校」というキャッチフレーズを用いているが、この「地域」としてどのような範囲をイメージしたかという質問を行ったところ、表3の結果を得た。最小単位の志和堀という回答が多かったが、西条盆地や東広島市を選んでいる人も少なくなかった。因みに、

来場者の構成は東広島市民が2/3で広島市民が1/3程度であり、東広島市民の中ではこの近くの住民は少なく（1割未満）、自動車で30分以上かかるようなところから訪れている。おおむねこの地区には馴染みの薄い人が来ているということになる。

西条盆地	東広島市	志和町	志和堀
11.4%	10.2%	30.7%	33.0%

表3 来場者が展示から受け取る地域の範囲
「地域」が指していると思う範囲は？という質問への回答。
データは2002年（2001年もほぼ同じ傾向）

別の設問として、先の問いで選んだ地域についていくつかの印象を尋ねたところ、どの範囲を選んだかによる回答の差が認められなかった。この結果は調査者からすると意外な結果で、農村景観が残りホテルが乱舞する地区と、大学や工場が立地し、さらにベットタウン化も進み、人口急増地とである東広島市とが同じイメージで認識されていた。言い換えれば、スタッフや地区住民がこだわる「地域」でも、外から見れば大した違いはないということでもある。

また、アンケートの中には、来場者がスタッフを地元住民とみているらしいと感じさせる回答がいくつかあった。東広島市民が東広島市内で活動していると考えれば、スタッフが地元住民であるのは確かだが、現場ではスタッフのことを地区住民もスタッフ自身も「よそ者」とみて何の疑いももっていなかったため、その結果には戸惑いを覚えた（表4）。しかし、もしスタッフが「我々は東広島市民だから地元住民だ」という態度でこの活動を行おうとしたら、活動はとん挫するにちがいない。「よそ者」として、地区住民と適度な距離感を保つからこそ両者が良好な関係を築けている^{*12}。

	志和堀住民から見て	スタッフ自身の意識	来場者のイメージ
スタッフは何者？	よそ者	よそ者	地元住民

表4 企画運営者の立場

これらのことはエコミュージアム活動を進める上で重

要である。テリトリーを基礎に地域を博物館とみなすエコミュージアム活動は進められるわけだが、基礎にすべき「地域」はひとつではない。さまざまな「地域」が併存し、人によって立場によってさまざまに認識されている。また、「地域」はひとつではないということが、考えれば当たり前であっても、平素あまり意識されないということも示唆している。

5. エコミュージアム活動の空間 ーテリトリーとは何か

EM研はメーリングリストを介したネットワークである。そのため会としての意志決定や主体的な活動を行う能力に欠けるなどの欠点はあるがメリットもある。

エコミュージアムはサテライトを結びつけることによって成り立つ。地域を表象する要素として意味の次元で関連づけることも重要だが、個々のサテライトを活用している住民グループを結びつけるという組織レベルの連携も必要である。エコミュージアムを担う組織には、各活動をいかにネットワークするかが課題となる。この時に組織横断的な連絡会のような組織をつくると、連絡調整会議への出席などプラスαの仕事が発生させたり、場合によっては連絡組織が個々の組織を束ねる上部組織として認識され、義理のつきあいをされたりすることもある。横の連携をつくり、それを活かすためには、連携を仕掛ける活動には、既存の活動に対して余計な負担を強くないことと、構築したネットワークの使い勝手をよくすることが必要である。

EM研はこのような議論のレベルには全く達していないので参考にはならないが、連絡組織＝メーリングリストのみというような形態は、サテライトの活動をネットワーク化するには便利な選択肢であるし、エコミュージアムに関心がある人が最初に立ち上げる際には有効な手段になるだろう^{*13}。

次にこのような形態をとった場合のエコミュージアム活動のさまざまな空間についてまとめてみたい。図3にE

M研をもとにしたエコミュージアムの組織空間・活動空間・行政空間の概念図を描いた。エコミュージアム活動を担う組織として「エコミュージアム研究会」なる任意団体を想定するならば^{*14}、その会に所属する人たちの範囲が組織の空間になる。EM研のようなメーリングリストの場合は一種のサイバースペースが組織空間になる。ただし、研究会が活動する空間はこれとは必ずしも一致しない。EM研を例にすれば、会として活動しているのは特定の地区に限られ、また、メンバーがそれぞれ活動している空間（いかにすればサテライトの活動空間）はEM研とは独立したものである。当然、個々の活動空間は相互に独立している。拡大解釈すれば、EM研の活動区間はこれらの諸活動空間の和集合になる。しかも、これらは絶えず変化している。

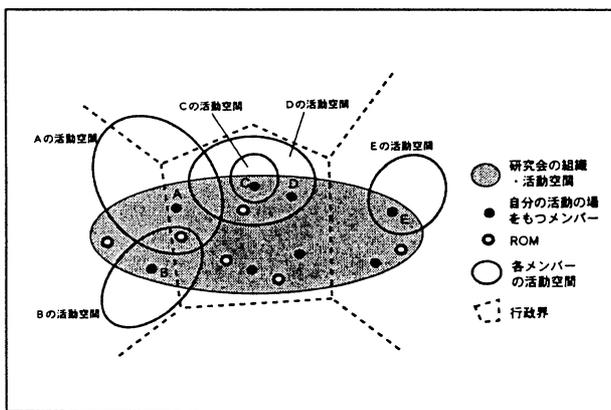


図3 エコミュージアムの組織空間・活動空間・行政空間

さらに付け加えると、この組織空間も活動空間もともに行政圏域と一致する必然性はまったくない。これまでのJECOMSの大会開催地や各地の事例として取り上げられる例をみると、広域連携がテーマになることもあったが、テリトリーは原則として行政界が基本単位ないし所与の条件とされていた。地域住民にとって、まとまりのある地域や意味のある地域をエコミュージアムのテリトリーととらえる場合、行政圏域はそのような空間のひとつに過ぎないわけで、エコミュージアムを構想し実践する上で、テリトリー＝行政圏域とすることに対して、より懐疑的であってよいのではなからうか。

些末なこだわりではあるが、住民が「自分の空間」とい

う実感をもてるテリトリー設定ができてはじめてエコミュージアムの活動は広く浸透する。自分がある市町村の住民であるという意識は、だれもが持つだろうが、それとは異なる空間への帰属意識も同時にもっている。そこには都道府県や国など、さらに広い空間がある一方、より狭い空間も当然ある。エコミュージアムのテリトリーとしては後者に根ざした方が住民の生活感覚に合うのではないだろうか。

このように考えると、エコミュージアムにおけるテリトリーは単層的なものよりも、多層的なものとしてとらえ（図4）、それに基づいたエコミュージアム像を描くのが望ましい。広いテリトリーの中であって、それを構成する特色のある地域・地区はそのスケールでのサテライトとなるが、そのサテライト自身を小さなテリトリーとみなすことが可能で、その中にはそのスケールでのいくつかのサテライトがある。テリトリーの範囲を絞れば、テリトリーのテーマや特徴を具体的に描くことが可能になる。広いスケールでの抽象的でありふれたテーマ（キャッチフレーズ）より、狭いスケールでの具体的なテーマの方が住民にイメージされやすいし、そこに力点をおいた方が住民の主体性が発揮されやすいように思う。

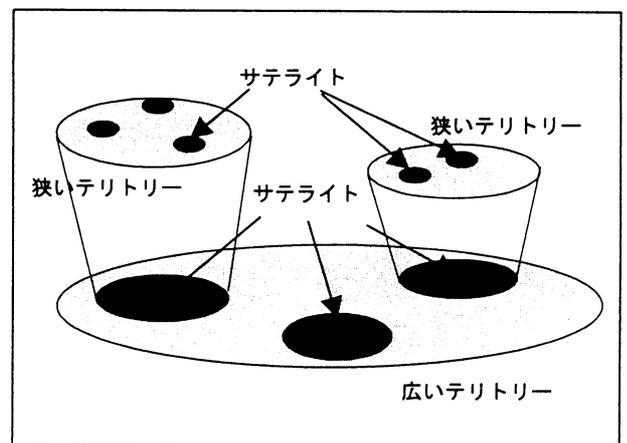


図4 階層的なテリトリー

平成の大合併の名のもとに、各地で広域合併の話が進められる現在、テリトリーとして市町村を前提とすることの意味が、場合によって次第に薄れていくのではないだろうか。逆に新しい広大な自治体への求心力をつくりだすため

にエコミュージアムの理念を用いることも考えられるが、住民はあまりに広い地域に対して郷土意識・郷土アイデンティティを持てるのだろうか。その結果、かつての大字レベルのようなヒューマンスケールの空間領域がエコミュージアムのテリトリーとして重要になっていくのかもしれない。

最後に、本報告では、EM研に関わる者の立場から、研究会の組織空間と活動空間と行政空間の錯綜する状況について整理し、そこから示唆されるテリトリーの問題について述べた。ここでは単にテリトリーの空間的な広がりだけを問題にしたわけではなく、その空間をどのように表象するのか、意味づけるのかについても視野に入れなければならないし、福田(2002)^{※15}が指摘するように、この空間を確定することやその空間にある意味を与える行為自体の問い直しも必要である。これらについて、本報告では言及することができなかつた。今後の課題としたい。

注

- ※1 当時は違つたが、現在はYAHOO! JAPANがこのサービスを提供している。
- ※2 メーリングリストはメンバー内に閉じているので全くの見ず知らずの人が登録されることはない。クチコミで登録者を増やしていった。
- ※3 2000年7月から2002年10月末時点までの28ヶ月間に送信された電子メール数は、1,549通(月平均55.3通)である。
- ※4 いろいろな分野の大学の研究者がメンバーにいたので、エコミュージアム運営における専門家との連携やサテライトの学術的評価を行うことなどへのハードルが低いことも本研究会の特徴である。
- ※5 写真4、5は2001年のもの。この時は大学の教養課程の授業と当該地区の小学校の課外活動を結びつけた。
- ※6 EM研では、この農機具類に関する聞き取り調査を行い、写真付きのガイドブックを作成した。この作業も一般からの参加を募って行った。
- ※7 この広島は広島市ではなく、広島県レベルのスケールを想定している。
- ※8 注1のメーリングリストサービスでは利用者登録すると過去のメールを全て読むことができるので確認可能である。
- ※9 会として関わっている場所としては、東広島市の中心市街地に残る西条酒蔵地区もある。日本三大銘醸地の一つと自称するこの地区には、造り酒屋が軒を並べ、独特の町並景観が残り、それを活かした地域づくりが行われている。必ずしも統一的かつ熱心な活動はなされていないが、行政や企業、地区住民、その他市民などがそれぞれの立場で関わっている。EM研はそのような活動のひとつに、会として参加している。
- ※10 意識的にそのようにしているが、話し合いの中での報告者の影響はある。その意味では調査方法として問題はあることを否定できない。
- ※11 アンケートは来場者に用紙を手渡し記入してもらった。2001年は151通、2002年は88通のアンケートを回収した。
- ※12 この点に関して、菊池直樹(2002)「エコミュージアム研究に向けた若干の視点」『エコミュージアム研究』7、92頁の「より重要なのは、よそ者/地元という人間分節を解体すること」との主張には、本来的にはそうかもしれないが、現実的な観点からは疑問を感じる。EM研の活動の場合、よそ者はおおむね新住民だが、活動の中で、いわゆる新旧住民間の障壁より、旧住民間(=地区間)の障壁の方が厳しいことに気づく。単純によそ者と地元を2分できないということでもあるが、新住民が特定の狭い地区に関わる場合、よそ者然としていた方がものがとが円滑に進むように思える。これは互いに干渉しないという意味ではなく、相互に関わり合い、それぞれが影響を受け合う関係を作ることを前提とし

た上での意見である。また、特にエコミュージアムの場合、地域へのこだわりがその成立を支える重要な要素なので、地元意識を持つことや、その延長線上の地元住民という線引きをすることを簡単には否定できない。

- ※13 メーリングリストの場合、パソコンを持っていない人やうまく扱えない人はどうするのかという問題がある。あくまで活動を軌道に乗せるまでとか、活動が大きくなるまでといった条件が付くことになるだろう。また、メンバーが増えるとメールの匿名性が高まったり、メールの量が増えるなどの問題もある。自ずとこの種の取り組みにはメンバーの広がりには上限ができるように思われる。
- ※14 新井重三編著(1995)『実践エコミュージアム入門』牧野出版、18頁。
- ※17 福田珠己(2002)「現代社会の中のエコミュージアム」『エコミュージアム研究』7、84頁。